

## 第182回「元気に百歳」クラブ 俳句サロン「道草」開催

絵を描く友人Nさんが、亡きお義母さまの遺作である「篆刻」4作品と「ちぎり絵」2作品、それにご自身の絵20作品を展示した「二人展」を、奥様とご一緒に青山で開催されていました。今日はその「二人展」を拝観するために、青山に向かいました。青山骨董通りにある静かな会場は、Nさんや奥様のお友達が、絶え間なくお見えになっていて、画廊の御主人もご配慮の行き届いたお方。本当に温かい明るい「二人展」でした。拝観させていただいた後、いささか豊かな気持ちになって新橋に向かいました。

9月6日（金）です。本日ご出席の方々は、芦川創風さん、井上蒼樹さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、原晶如さん、本間傘吉さん、森田多佳さんと芦尾白然の11名。欠席投句は、上田枯葉さん、木村栄女さん、住田幸佳さん、船戸清助さんの4名が参加して下さいました。そして今日もまた、明峰さんから草月庵の銘菓「黒松」の差し入れを頂戴しました。明峰さん有難うございます。

住田先生は、開講の冒頭で、日々の変化する韓国の情勢や、京浜急行電鉄の思いもしない脱線事故、あるいは携帯電話を枕元に置くことで、認知症への危険度が増すという話をなされた後、「今日の席題は易しいかな、いやー、やっぱり難しいですね」と、ニッコリ笑みを漏らし出題されました。皆さんが沈黙して取り組み、詠まれ、そして選句された天賞句と最多得票賞（☆印）句は、次の通りです。

席題1. 「黒葡萄」又は「葡萄」

- |                 |    |    |
|-----------------|----|----|
| ◎『墨色の葡萄一房青磁皿』   | 晶如 | 天2 |
| ◎『葡萄踏む乙女の足や恋の唄』 | 荻女 | 天1 |
| ◎『荷の来たり六房並ぶ黒葡萄』 | 多佳 | ☆6 |

席題2. 「秋団扇」

- |                  |    |      |
|------------------|----|------|
| ◎『秋団扇扇げば過ぎし日の匂い』 | 明峰 | 天3☆9 |
| ◎『都市対抗野球乃名残秋団扇』  | 白然 | 天1   |

席題3. 当季雑詠の自由題句

- |                     |    |      |    |
|---------------------|----|------|----|
| ◎『新涼や煮物の鍋のかたかたと』    | 幸佳 | （投句） | 天2 |
| ◎『一片の雲の流れや秋寄せる』     | 明峰 |      | 天1 |
| ◎『電柱の陰より出でて笑う月』     | 栄女 | （投句） | 天1 |
| ◎『べい独楽のぶつかり飛んで勝負かな』 | 晶如 |      | 天1 |
| ◎『山の湯や声それぞれの秋の蟬』    | 清助 |      | ☆5 |

種無しや皮ごと頬張る黒葡萄 住田道人

席題1. では、晶如さんの句「墨色の葡萄一房青磁皿」が、天賞二つを獲得しました。墨色の葡萄と青磁のお皿の色の対照が、読者の脳細胞の「爽やかさ」感度を震わせたようです。この句はよく見ますと、上五「墨色の」の「の」の字が漢字であれば、句全体が漢字一色になる句でもありました。次に荻女さんの句「葡萄踏む乙女の足や恋の唄」が、天賞一つを獲得しました。大きな桶の中で、美味なる葡萄酒を造るために葡萄を踏む乙女、口ずさむのは恋唄であり、その辺りが選者の琴線に触れたのでしょうか。多佳さんの句「荷の来たり六房並ぶ黒葡萄」が、最多得票（☆印）を獲得しました。中七、下五で一気に「六房並ぶ黒葡萄」と言い切った素朴さというか、外連味のなさが、贈り主への敬意を表しているようで、最多得票獲得の要因であったと思いました。選外でしたが、柴楽さんの句「黒葡萄舌に溢れる陽の恵み」が、高得票を獲得していました。下五の「陽の恵み」に、選者

の共感が集まったと思われます。中七の「舌に溢れる」も良いですね。

席題2. では、明峰さんの句「秋団扇扇げば過ぎし日の匂い」が、天賞三つと最多得票賞（☆印）に輝きました。これまた中七、下五で「扇げば過ぎし日の匂い」と、季語「秋団扇」を活かした表現が、選者の心を捕らえました。「懐かしさ」を心一杯に満たせてくれる句です。記録的な高得票を獲得した最多得票賞句でした。次に白然の句「都市対抗野球乃名残秋団扇」は、天賞一つをいただきました。住田先生から「全部漢字で表現すれば」とのアドバイスで、「乃」の字を教示していただきました。白然は先生のご忠告通り、上述のように推敲させていただきました。第90回都市対抗社会人野球大会で応援する川崎市Tは、準決勝戦で優勝した千葉市Jに負けてしまいました。選外でしたが、傘吉さんの句「秋団扇酒宴の友の長話」も高得票でした。傘吉さんらしい「友の長話」というけじめの表現に、選者の共感が集まったのでしょ。う。

席題3. 自由題句では、投句の幸佳さんの句「新涼や煮物の鍋やかたかたと」が、天賞二つを獲得しました。選評のときに「新涼のこの時期、主婦たるものは、ふっと鍋物を考えるもの」との評があり、強く印象に残りました。煮物の鍋が出す「かたかた」という音に、秋の深まる気配を予想します。次に明峰さんの句「一片の雲の流れや秋寄せる」が、天賞一つを獲得しました。この句は、中七、下五の「雲の流れや秋寄せる」と、「流れる雲」に「秋を寄せさせた」感覚を、ピシヤリと「秋寄せる」と表現した技に、読者は感じ入りました。もう一句、投句の栄女さんの句「電柱の陰より出でて笑う月」も、天賞一つを獲得しました。この句は上五、中七で「電柱の陰より出でて」と、お月さまをごく普段着で、ありきたりの場所から出させたことが、大成功でした。もうこの辺りを読んでいるとき、読者はニッコリし、笑みを浮かべていたと思います。晶如さんの句「べい独楽のぶつかり飛んで勝負かな」が、天賞一つを獲得しました。この句は、八十路に達する男たちには懐かしい光景であると思います。樽のようなものにほろを被せ、少し余裕を持たせてべい独楽の回る舞台を作る。このほろの上で子供たちがべい独楽を回す、ぶつかって弾き飛ばされたべい独楽が負けです。技術のいる遊びでした。懐かしさに一票ではなかったでしょうか。そして、投句された清助さんの句「山の湯や声それぞれの秋の蟬」が、最多得票賞（☆印）に輝きました。まさにこの時期の山宿の光景でしょう。幾種類かの蟬の鳴き声、それぞれ感慨があると思われます。

9月に入りましたので、11月に企画している行田市での「吟行」は、いよいよ具体性のある準備をする時期になりました。実は、9月16日に、住田先生、明峰さん、白然で、行田市俳句連盟が企画している「川島奇北忌俳句大会」に、下見を兼ねて参加することになりました。緊張もしますが、とにかく行って参ります。

本日の二次会は、洋酒居酒屋ローズ&クラウン新橋店にお世話になりました。前述しましたように、11月の合同吟行の準備のために、10月には明峰さんが、浅草「今半」での「元気に百歳」クラブの「道草」と、東京兵庫県人会の「道草」の合同懇親会を企画して下さっていました。この準備のことも話題になって、少し忙しい二次会であったかも知れません。ですが、今度の合同吟行を成功させるためにも、10月の浅草「今半」での懇親会は、明るく和やかに終えたいです。皆さんよろしくお願ひします。

白然記